

【データを讀む】 8年間の学生の 変遷からみえる 大学教育の 成果と課題

ベネッセ教育総合研究所 研究員
松本 留奈

テーマ1 【データを読む】 8年間の学生の変遷からみえる 大学教育の成果と課題

本稿は、第1回調査(2008年)から第3回調査(2016年)までのデータの動きに着目し、この間の大学生の学習・生活の実態、意識の変化をとらえることを目的とする。経年での変化を中心に調査全体を概観し、大学教育の成果と課題を整理しておくことで、この後に続く論考につなげたい。

2008年から2016年の8年間、大学を取り巻く環境は厳しかったといわざるを得ない。

厳しい環境のひとつは、少子化による18歳人口の減少だ。1990年代半ばを過ぎ18歳人口が減少に転じてからも、進学率は上昇し続けたため大学生の数は増加傾向にあった。しかし、2009年頃から進学率の伸びが止まり、2018年からの急激な18歳人口減少を目前にした今、多くの大学の経営は生き残りをかけた競争環境に置かれている。進学率が50%を超えユニバーサル化したことが、入学者の質の担保を難しくし、入学者選抜の方法や入学後の教育に課題をもたらしている。

さらに日本が直面する経済・社会の課題が、大学に対する要望を厳しいものにしていく。少子高齢化の進行・人口減少、生産年齢人口減少・経済規模の縮小、財政状況の悪化、グローバル化によるボーダレス化、国際競争の激化、地球規模で解決すべき問題の増加、地方の過疎化と都市部の過密化の進行、社会的・経済的格差の拡大の懸念、産業構造・就業構造の変化、地域におけるケアサービス(医療・介護・保育等)の拡大といった解決困難な課題が山積している現状を突破するには、持続的に発展し活力ある社会を目指した変革を成し遂げなければならない。この社会状況に対応するべく、「生涯学び続け、主体的に考え、行動できる人材」「グローバル社会で活躍する人材、イノベーションを創出する人材」「異なる言語、世代、立場を超えてコミュニケーションできる人材」の育成が大学に求められている(「大学改革実行プラン」(2012年6月))。

とくに本調査がスタートした2008年以降は、大学教育の質的転換への要請が一層高まり、学生の教育成果保証が求められてきた。大学には、「卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)」、「教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)」、「入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)」の3つのポリシーを一貫性あるものとして策定し公表することが義務づけられ、学生も大学で何を身につけたのかが問われる時代

がやってきている。

このデータは、学生の教育成果保証への要求が高まるなか、大学教育がどのような変革を遂げ、その教育を享受する大学生はどう変化してきたかを辿る貴重な資料である。この8年間で大きな変化のみられた5つのテーマを確認していきたい。

1. アクティブ・ラーニングの増加と授業の多様化

大学の授業(表1-1)で際立って増加しているのが、アクティブ・ラーニングの機会である。「グループワークなどの協同作業をする授業」(2008年→2016年18.1ポイント増)、「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」(2008年→2016年16.0ポイント増)、「ディスカッションの機会を取り入れた授業」(2008年→2016年19.0ポイント増)となっている。

その他の授業の機会もおおむね増加傾向にあり、大学の授業はより多様なスタイルに変化してきたといえるだろう。「提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業」(2008年→2016年9.8ポイント増)からは教員の指導力の強化が、「語学以外の授業で外国語で行われる授業」(2008年→2016年9.0ポイント増)からはグローバル化への対応が、「大学での学習方法を学ぶ授業」(2008年→2016年9.3ポイント増)からは初年次教育の充実がそれぞれうかがえ、大学教員が相当な授業改善や工夫を施してきたことがわかる。

とくに増加率が高いアクティブ・ラーニングの機会について、学部系統別にみてみよう(表1-2)。資格取得を目的とする医・薬・保健系、教育系は、カリキュラム内に実習が多く含まれるため全体的にアクティブ・ラーニングの機会も多い。どの学部も増加傾向ではあるが学部系統別に比較すると、人文科学、社会科学系では特にグループワークの機会が、理工系ではディスカッションの機会が増加している。また文系のなかでも、社会科学系より人文科学系のほうがアクティブ・ラーニングの機会が多い。

では、大学の授業の変化を受けて、学生の学習態度はどのように変容しているのだろうか。次にみていく。

**2. 学生は真面目化、
高校の探究学習が大学での学習に好影響**

授業への取組み (表1-3) で、大きな変化がみられたのは「グループワークやディスカッションで自分の意見を言う」(2008年→2016年11.8ポイント増)、「グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する」(2008年→2016年13.9ポイント増)である。これは表1-1で示したアクティブ・ラーニングの機会の増加によるものであろう。グループワークやディスカッションの経験を積み、自己主張や意見を調整する術

を獲得させたことは、改革がもたらした学習成果といえる。「授業の復習をする」(2008年→2016年12.0ポイント増)は、過去2回との比較ができないものの表1-1「学期末以外にもレポート・テストが課される授業」(「よく+ある程度あった」84.4%)の頻度に起因しているのではないだろうか。期中に小ステップで理解度を確認される機会が多くあることが、学生をふだんから復習に向かわせていると考えられる。

また、「履修した科目は途中で投げ出さない」、「授業で出された宿題や課題はきちんとやる」は8年間を通じて8

Q あなたはこれまで大学で、次のような授業を経験しましたか。

表1-1 学びの機会

	2008年	2012年	2016年	08→16年の差 (%)
1: ディスカッションの機会を取り入れた授業	46.7	54.2	65.7	19.0
2: グループワークなどの協同作業をする授業	53.3	59.1	71.4	18.1
3: プレゼンテーションの機会を取り入れた授業	51.0	57.6	67.0	16.0
4: 少人数のゼミ・演習形式の授業	62.9	64.7	61.9	△1.0
5: 上級生や下級生とやりとりがある授業	19.7	25.9	27.7	8.0
6: 教員と双方向のやりとりがある授業	46.1	50.5	50.8	4.7
7: 提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	40.7	43.7	50.5	9.8
8: 学んだ内容を文章や口頭でふりかえる授業			50.8	
9: 学期末以外にもレポート・テストが課される授業			84.4	
10: 実験や調査の機会を取り入れた授業	45.1	49.6	49.8	4.7
11: 教室外で体験的な活動や実習を行う授業	32.4	39.1	41.1	8.7
12: 学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業		53.4	52.0	
13: 高校で学習する教科の補習授業	32.1	34.5	35.6	3.5
14: 大学での学習方法を学ぶ授業	28.7	34.9	38.0	9.3
15: 語学以外の授業で、外国語で行われる授業	28.2	29.4	37.2	9.0

※1 「よく+ある程度あった」の%。
 ※2 2008年、2012年は、「上級生と下級生が授業時間内にコミュニケーション(議論・質問・対話など)がとれる授業」とたずねた項目と比較した。
 ※3 2008年、2012年は、「教員と学生が授業時間内にコミュニケーション(議論・質問・対話など)がとれる授業」とたずねた項目と比較した。

表1-2 学びの機会 (学部系統別)

		人文科学	社会科学	理工	農水産	医・薬・保健	教育
		2008年(837) 2012年(749) 2016年(937)	2008年(1,553) 2012年(1,693) 2016年(1,555)	2008年(980) 2012年(937) 2016年(1,079)	2008年(125) 2012年(216) 2016年(168)	2008年(283) 2012年(556) 2016年(528)	2008年(143) 2012年(261) 2016年(229)
グループワークなどの協同作業をする授業	2008年	62.0	47.4	49.0	44.0	63.9	73.4
	2012年	65.7	54.3	50.1	55.1	70.1	74.0
	2016年	73.9	62.9	56.6	57.7	73.9	82.1
	08→16年の差	11.9	15.5	7.6	13.7	10.0	8.7
ディスカッションの機会を取り入れた授業	2008年	56.2	45.6	34.6	32.8	55.4	67.8
	2012年	64.4	51.5	43.2	45.3	59.3	72.4
	2016年	78.0	67.7	63.9	66.6	80.3	84.7
	08→16年の差	21.8	22.1	29.3	33.8	24.9	16.9
プレゼンテーションの機会を取り入れた授業	2008年	58.6	47.5	46.6	43.2	53.3	64.3
	2012年	64.9	53.3	51.8	53.2	64.5	65.1
	2016年	72.2	64.7	63.0	64.9	71.2	75.9
	08→16年の差	13.6	17.2	16.4	21.7	17.9	11.6

※1 「よく+ある程度あった」の%。

割を超えており、現代の大学生の真面目さを示している。

次に、高校の学習との接続を確認するために、高校時代の探究学習（自分で問いを立てる、課題解決の情報を収集する、課題解決の方法を考える、学外の人に話を聞きに行く、グループで話し合う、学習の成果を人前で発表する、など）の経験別に、大学の授業への取り組み方をみてみよう（表1-4）。「履修した科目は途中で投げ出さない」、「授業で出された宿題や課題はきちんとやる」といった真面目な態度にはほとんど差がない。一方で、学習意欲、グループワークやディスカッションへの取組み、計画的、自主的な学習、日々の授業への取組みをた

ずねる項目において、高校時代の探究学習の経験が多かった学生のほうが前向きに取り組んでいると回答する傾向にあり、高校時代の探究学習の経験が、大学の学習へのスムーズな移行に貢献しているようである。新学習指導要領による高校までの教育段階の変化が、大学教育にどのような影響をもたらすのか、今後とも期待を持って注目していきたい。

冒頭で述べたように、近年の大学教育は学習成果（ラーニングアウトカム）を軸に置き、「学生が何を身につけたか」によって教育の質保証としている。本調査ではあくまでも自己評価ではあるが、22項目によって多面的

Q あなたは大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか。

表1-3 授業への取組み

	2008年	2012年	2016年	08→16年の差 (%)
1: 履修した科目は途中で投げ出さない	81.2	82.8	83.8	2.6
2: 授業で出された宿題や課題はきちんとやる	87.4	87.5	85.9	△1.5
3: できるかぎり良い成績をとろうとする	73.4	73.9	76.2	2.8
4: グループワークやディスカッションで自分の意見を言う	46.8	51.5	58.6	11.8
5: グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する	53.5	56.0	67.4	13.9
6: 計画を立てて学習する	41.8	42.4	49.0	7.2
7: 自分の意思で継続的に学習する	55.6	58.2	59.2	3.6
8: 授業に興味をもったことについて自主的に学習する	61.7	60.2	59.7	△2.0
9: 授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に学習する	61.9	57.9	59.7	△2.2
10: 授業でわからなかったことは、自分で調べる	66.0	67.5	68.4	2.4
11: 授業の予習をする	32.5	32.6	35.4	2.9
12: 授業の復習をする	34.6	39.5	46.6	12.0
13: 授業でわからなかったことは先生に質問する	34.9	35.2	41.3	6.4

※1 「とても+まああてはまる」の%。

表1-4 授業への取組み（高校時代の探究学習の経験別）

	高校時代の探究学習の経験 (%)		
	多かった群 (2,197)	少なかった群 (2,751)	(多かった群) - (少なかった群)
1: 履修した科目は途中で投げ出さない	87.3	81.1	6.2
2: 授業で出された宿題や課題はきちんとやる	88.5	83.8	4.7
3: できるかぎり良い成績をとろうとする	82.1	71.6	10.5
4: グループワークやディスカッションで自分の意見を言う	71.7	48.0	23.7
5: グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する	78.0	58.8	19.2
6: 計画を立てて学習する	61.4	39.0	22.4
7: 自分の意思で継続的に学習する	71.1	49.6	21.5
8: 授業に興味をもったことについて自主的に学習する	73.5	48.6	24.9
9: 授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に学習する	71.1	50.6	20.5
10: 授業でわからなかったことは、自分で調べる	78.9	60.0	18.9
11: 授業の予習をする	46.2	26.8	19.4
12: 授業の復習をする	58.6	37.0	21.6
13: 授業でわからなかったことは先生に質問する	54.2	31.0	23.2

※1 「とても+まああてはまる」の%。

※2 高校時代の探究学習の経験についてたずねた8項目の回答結果を、「よくあった=3点」、「時々あった=2点」、「ほとんどなかった=1点」に換算し、合計得点を算出。その合計得点を、1:1にもっとも近くなる点で分け、得点の高いグループを「多かった群」、少ないグループを「少なかった群」とした。

な学習成果の確認をしている (表1-5)。2008年から8年間の変化をみると、「自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる」(2008年→2016年5.9ポイント増)、「社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)に積極的に参加する」(2008年→2016年7.4ポイント増)がわずかに増加しているだけで、その他の項目には変化がみられない。

本設問では何をもって「身についた」とするかは回答者に委ねられている。よって客観的評価と同等に解釈できないという点は前提に置かねばならないが、大学の授業が多様かつアクティブになり、学生の学習態度にもポジティブな変化がみられるにもかかわらず、大学生生活を通して自信を持って能力・スキルを「身につけられた」と回答する学生が増加していないのはなぜだろうか。背景のひとつとして考えられるのは、学生自身が能力・スキルの獲得を確認できる場がまだまだ乏しいことである。獲得した能力・スキルを発揮できる場を学生に用意する、あるいは客観的テストを実施しその結果を学生にフィードバックするといったことで、学生の能力・スキルの獲得を可視化し「身につけた実感」まで培うことが重要だろう。



あなたは次のようなことについて、大学生生活全体を通じてどの程度身についたと思いますか。

表1-5 大学生生活を通して身についたこと

(%)

	2008年	2012年	2016年	08→16年の差
1: 筋道を立てて論理的に問題を解決する	62.8	63.2	63.3	0.5
2: 現状を分析し、問題点や課題を発見する	64.3	65.5	65.4	1.1
3: ものごとを批判的・多面的に考える	68.0	67.3	66.4	△1.6
4: 必要な情報を収集、整理する			73.6	
5: 自分の知識や考えを文章で論理的に書く	64.6	65.1	64.4	△0.2
6: 学び続ける姿勢をもつ			64.7	
7: 自分で目標を設定し、計画的に行動する	59.4	59.3	58.0	△1.4
8: 図や数表を用いて問題を理解し、表現することができる			49.8	
9: 自分の考えを相手に伝えるように話す			67.0	
10: 既存の枠にとらわれず、新しい発想やアイデアを出す	48.3	49.4	52.4	4.1
11: なにごとにも粘り強く取り組む姿勢をもつ			64.8	
12: 社会や文化の多様性を理解し、尊重する	62.1	63.4	64.4	2.3
13: 自分の感情を上手にコントロールする	65.2	66.1	67.0	1.8
14: 自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる	37.0	37.9	42.9	5.9
15: 人と協力しながらものごとを進める	67.1	69.9	70.0	2.9
16: 異なる意見や立場をふまえて、考えをまとめる	64.5	64.2	64.5	0.0
17: グループの中で責任をもって行動する			61.9	
18: 社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)に積極的に参加する	21.0	26.7	28.4	7.4
19: 国際的な視野を身につける	45.6	42.8	43.8	△1.8
20: 外国語でコミュニケーションする			35.7	
21: 幅広い教養・知識を身につける	69.2	67.7	69.3	0.1
22: 専門分野の知識・技術を身につける	71.4	71.5	70.3	△1.1

※1 「かなり+ある程度身についた」の%。

3. 楽に単位をとりたい、大学に指導してほしいと考える学生が増加

大学教育に対する考えを【A】【B】2つの対立する選択肢から選んでもらった結果をみてみよう(図1-1)。2008年から8年間の変化をみると、授業・カリキュラム内容への意見、就職や将来に関連する項目に大きな差はみられない。授業・カリキュラム内容への意見では、「基礎・基本が中心の授業」、「教員が知識・技術を教える講義形式の授業」を望む声が7~8割を占め、学生はあまり難しくない講義中心の授業を好む傾向は変わらないことを示している。就職や将来との関連についても、「将来やりたいことを決めて、授業を受けるほうがよい」と「授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい」との意見は約半数ずつに分かれる。専門分野ややりたいことを決めている学生と、決めかねて柔軟性のあるカリキュラムを通して見極めたいと考えている学生が二分化している点に、大学は留意が必要だろう。

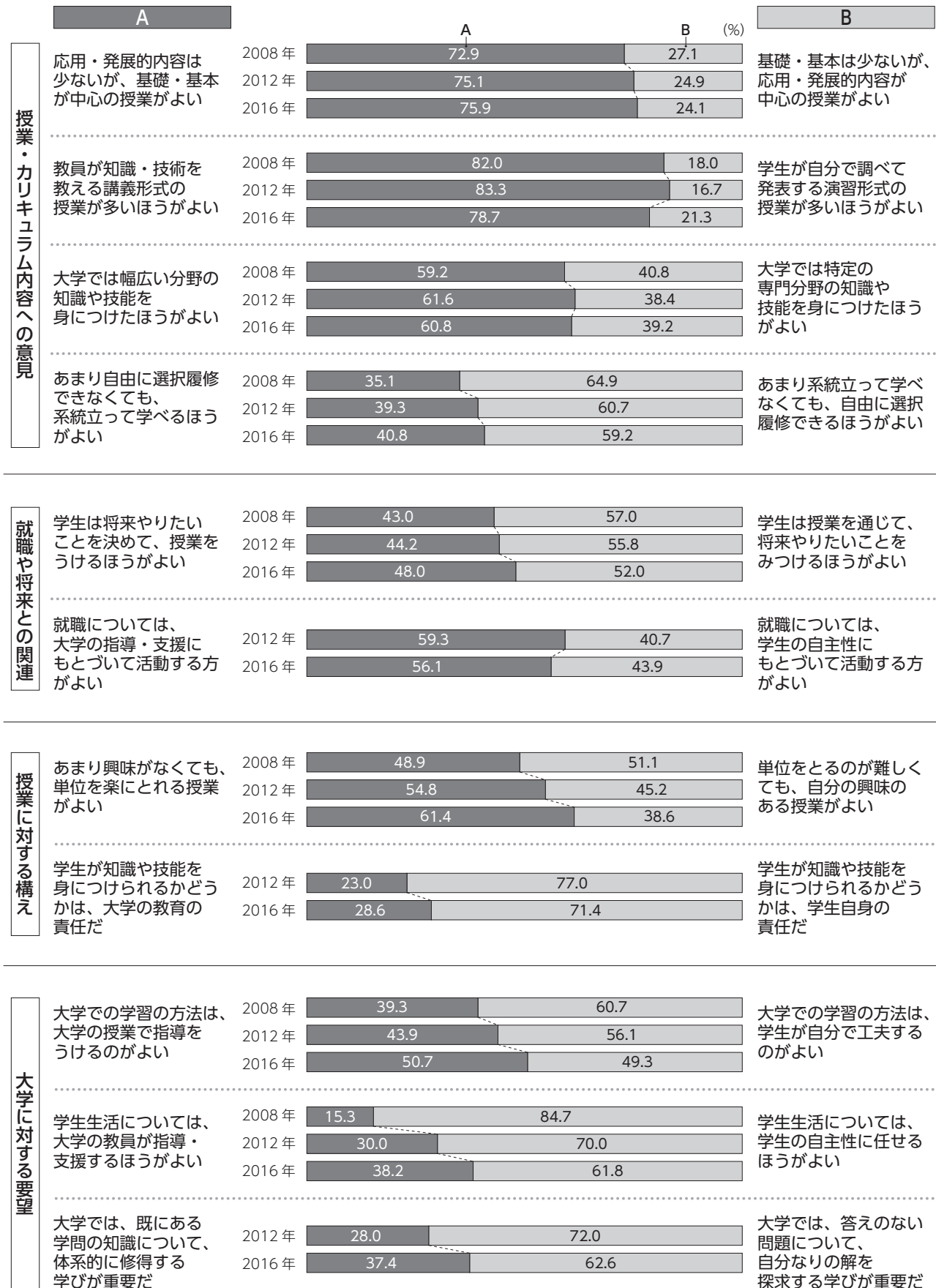
一方で、授業に対する学生の構えや大学に対する要望を示す項目で、大きな変化がみられた。これは学部や入試偏差値や地域によらず、大学生全体で起こった変化である。

テーマ 1 データを読む 8年間の学生の姿から見える大学教育の成果と課題

Q

大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか。

図1-1 大学教育観



テーマ 1
【データを読む】8年間の学生の姿からみえる大学教育の成果と課題

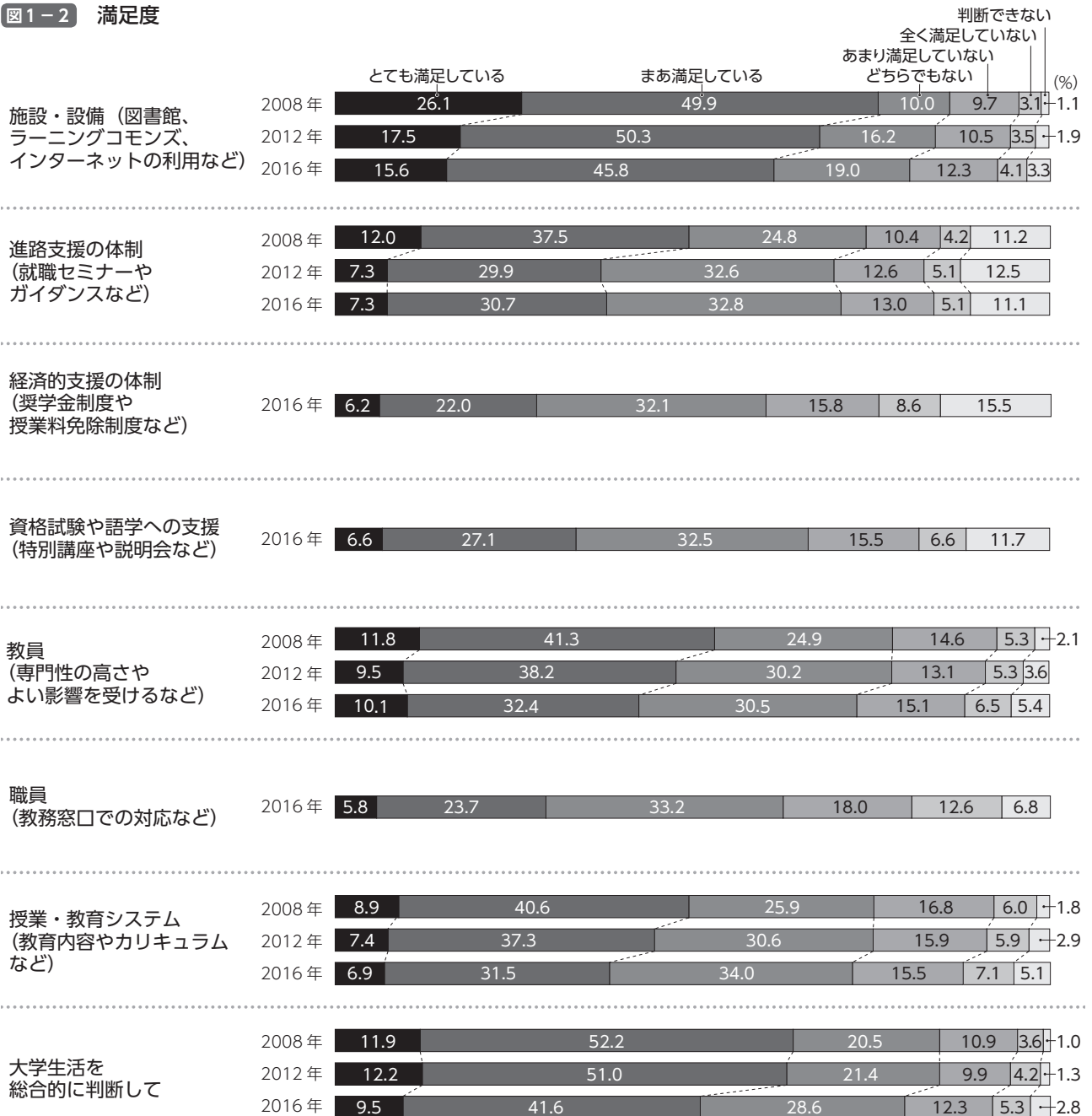
授業に対する学生の構えとして、「興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい」と考える学生が61.4%まで増加している(2008年→2016年12.5ポイント増)。この背景についてはいくつかの要因が考えられる。1つ目は、学生の学問への興味が低下していること。入学時に興味のある学問で大学を選択する学生は減少傾向にあり(2008年64.8%→2012年62.1%→2016年54.5%、図表省略)、そもそも興味のある授業がない学生が増加している可能性がある。2つ目は、学生の多忙化。1か月あたりの保護者からの仕送り平均額は減少し(2008年2.9万円→2012年2.7万→2016年2.3万、図表省略)、その分アルバイト平均額が増加している(2008年3.3

万円→2012年2.7万→2016年3.7万、図表省略)。当然ながらアルバイトにかかる週あたりの平均時間も増え(2012年6.5時間→2016年7.7時間、図1-9参照)、授業や課題にあてる時間が十分にとれず、楽に単位をとりたい傾向が高まった可能性がある。3つ目は、履修の問題である。1、2学年のうちに卒業に必要な単位の多くをとることが常態化しているなかで、アクティブ・ラーニングや課題の増加で一授業あたりの学生の負荷が高まる傾向にあって、全体のバランスを考え効率よく単位をとりたいと考える場面が出てくるのは当然のことであろう。以上のような状態が絡み合っただけの選択ではないかと考える。

Q

現在通っている大学について、どのくらい満足していますか。

図1-2 満足度



テーマ 1
「データを読む」 8年間の学生の変遷からみえる大学教育の成果と課題

「知識や技能を身につけられるかどうかは、大学の教育の責任だ」と考える学生も28.6%と少数派ではあるが増加している(2012年→2016年5.6ポイント増)。そして大学に対する要望をみると、「学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい」と考える学生が50.7%と過半数になり(2008年→2016年11.4ポイント増)、「学生生活については、大学の教員が指導・支援するほうがよい」と考える学生も38.2%と少数派ではあるが大幅に増加している(2008年→2016年22.9ポイント増)。これらの意識の変化の背景には、ユニバーサル化により大学が高校の延長線上としてとらえられるようになったことや、大学が学生に対し学業・生活両面でのケアを手厚くしてきたことなどが影響しているだろう。近年よく指摘される大学生の「生徒化」と大学の「学校化」が、本データにも表れているといえよう。

学生の大学に対する満足度をみてみよう(図1-2)。2008年から8年間の変化をみると、全体的に低下する傾向にある。これは学部や入試偏差値や地域によらず大学生全体の傾向である。

大学の授業が多様かつアクティブになり、学生の学習態度にもポジティブな変化がみられるなかで満足度が低下しているのはなぜだろうか。2016年のみの項目のため過去との比較はできないが、総合的な大学生活への評

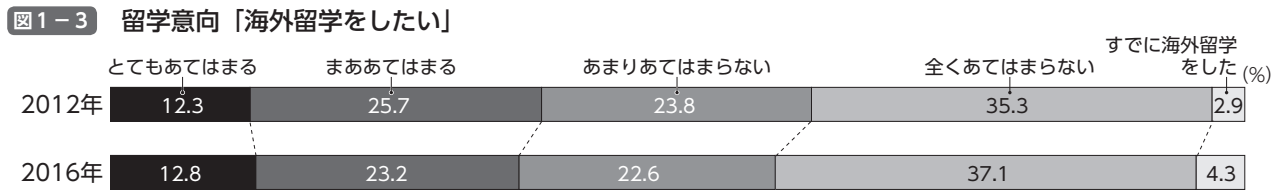
価を表す他の項目を確認すると、「学びの充実度」(「とても+まあ充実している」79.7%、図表省略)、「成長実感」(「とても+まあ実感する」73.6%、図表省略)については、約7~8割の学生がポジティブに回答している。一方で、「大学生生活を総合的に判断して(満足度)」にポジティブな回答をした学生は、約5割にとどまっている(「とても+まあ満足している」51.1%)。

「満足度」は、まず学生の大学に対する期待や要求があって、それに対して現状がどうかを測るものである。大学側の変化だけでなく、学生が大学に求めるものが変化した可能性も考えられる。学生の行動や意識の時代的变化も影響しているだろう。SNS(ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス)の広まりで他大学の学生生活との比較が容易になったことが、大学への期待や要求を変化させたかもしれない。あるいは、大学教育をサービスとしてとらえ消費者の目線から評価する学生が増えているのかもしれない。「満足度」という指標で大学を評価することの妥当性について、検証する必要があるだろう。

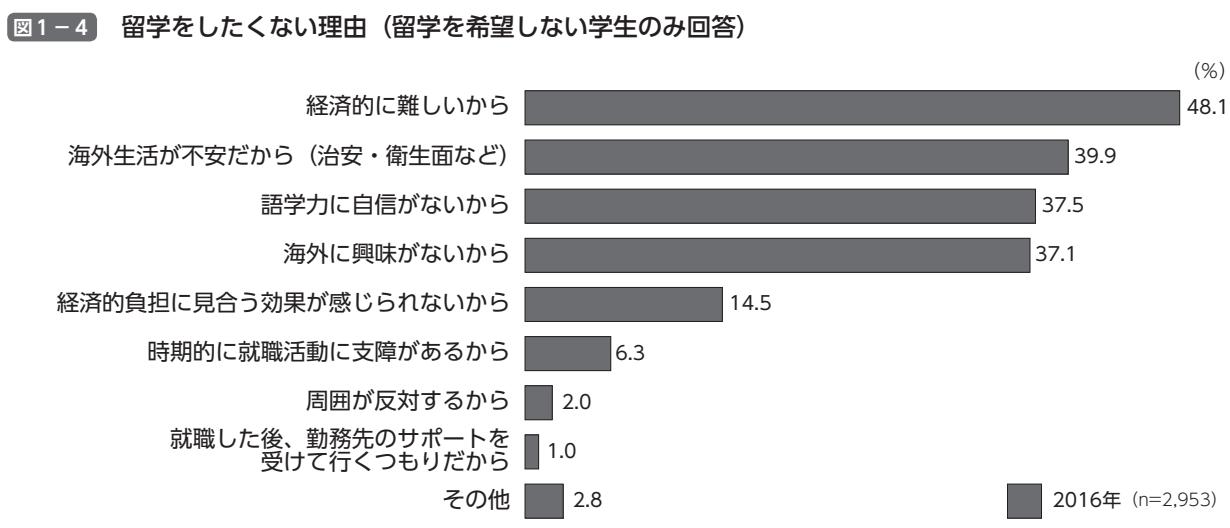
4. 留学したい大学生は増加せず

冒頭で述べたように、グローバル社会で活躍する人材の育成は、大学に強く求められるテーマのひとつである。この8年間で学生のグローバル化に対する意識や行動は

Q あなたの在学中(大学・大学院)の海外留学の意向について、あてはまるもの1つをお選びください。在学中にすでに留学をした方は「すでに海外留学をした」を選択してください。



Q あなたが留学したいと思わないのはなぜですか。(3つまで選択)



どのように変化したのだろうか。まず留学意向をみてみよう (図1-3)。海外留学の意向には、ほとんど変化がみられない「海外留学をしたい(「とても+まああてはまる+すでに海外留学をした」)」(2012年40.9%→2016年40.3%)。

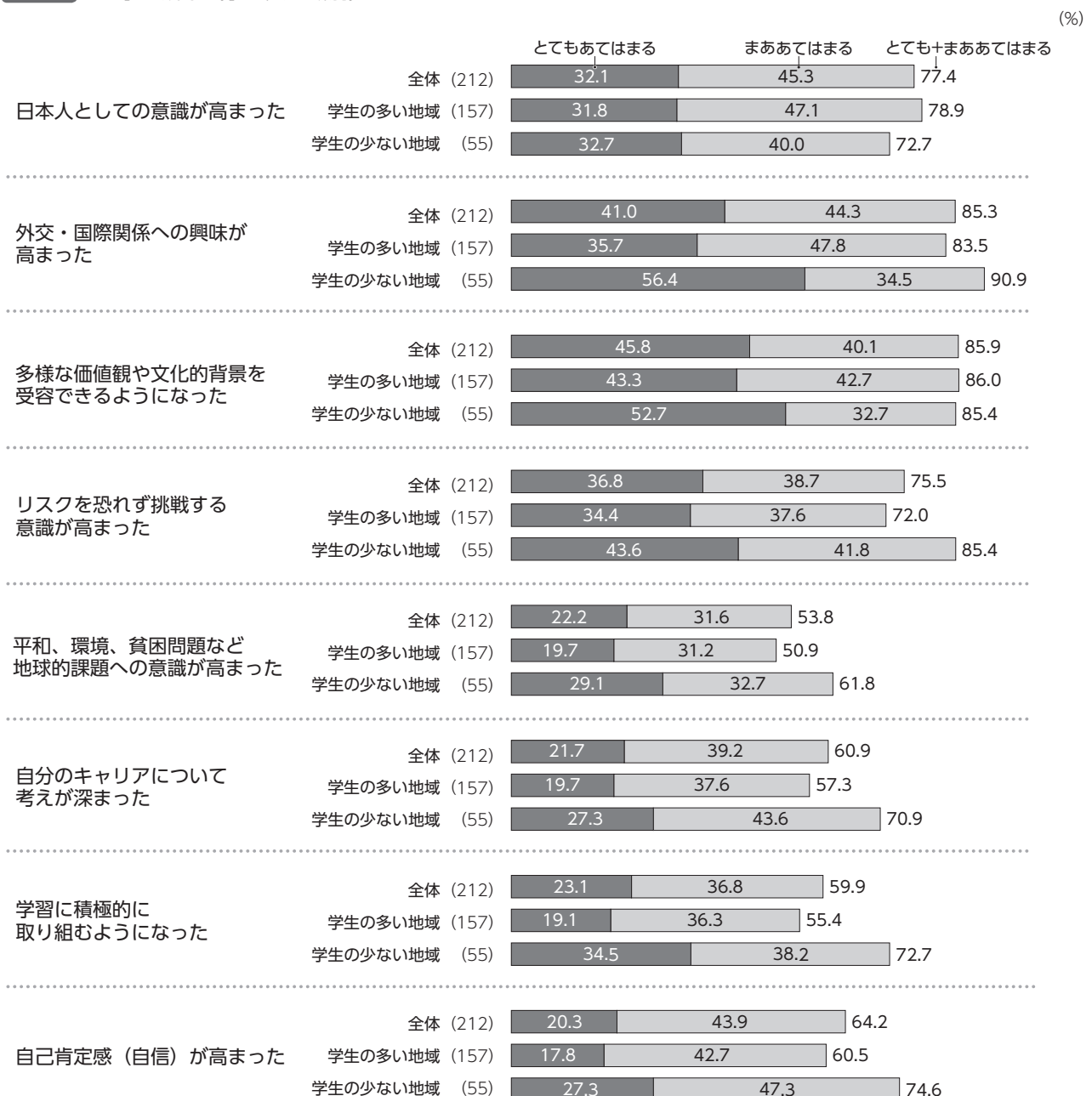
そこで、留学したくないと回答した学生に理由をたずねてみた (図1-4)。2016年のみの項目のため過去の比較はできないが、「経済的に難しいから(48.1%)」がもっとも多い。次いで「海外生活が不安だから(39.9%)」、「語学力に自信がないから(37.5%)」、「海

外に興味がないから(37.1%)」が続き、海外生活への不安や、海外への興味がないといった内向きと思われる理由をあげる学生も約4割近くいる。

では、留学の成果はどうだろうか (図1-5)。留学経験のある学生にたずねた結果が次である。全体でみると、「多様な価値観や文化的背景を受容できるようになった」、「外交・国際関係への興味が高まった」といった海外経験が直接的にもたらす感覚の変化は、約9割が「とてもあてはまる」、「まああてはまる」と回答している。一方で、日本での普段の大学生生活への影響といった間接

Q 留学経験によりあなたの意識や行動に変化はありましたか。

図1-5 留学の成果 (学生数地域別)



※1 総務省の統計(2016年)で全国約286万人の大学生のうち、10万人以上が在籍する9つの都道府県(東京都、大阪府、神奈川県、愛知県、京都府、兵庫県、埼玉県、福岡県、千葉県)在住の回答者を「学生の多い地域」、それ以外の都道府県在住の回答者を「学生の少ない地域」とする。

テーマ 1
「データを読む」 8年間の学生の変遷からみえる大学教育の成果と課題

的な効果である「学習に積極的に取り組むようになった」、「自己肯定感(自信)が高まった」は約6割にとどまっている。大学生に海外留学を推奨していく上で、留学経験を日本ででの学生生活に効果的につなげていくカリキュラムや取組みがより一層必要であろう。

また、学生の多い地域(10万人以上が在籍する9つの都道府県)と学生の少ない地域で、留学の成果を比較した(図1-5)。留学したと回答した学生は、学生の多い地域で4.8%、学生の少ない地域で3.3%(図表省略)といずれも少ないが、学生の少ない地域の学生のほうがより成果を感じていることが明らかとなった。都市部のほうが、学校外の活動の場が豊富で、さまざまな人とコミュニケーションする機会も多いだろう。その分、留学が特別に刺激的な経験ではなかった可能性があり、地域

による活動の機会の差が影響しているのかもしれない。

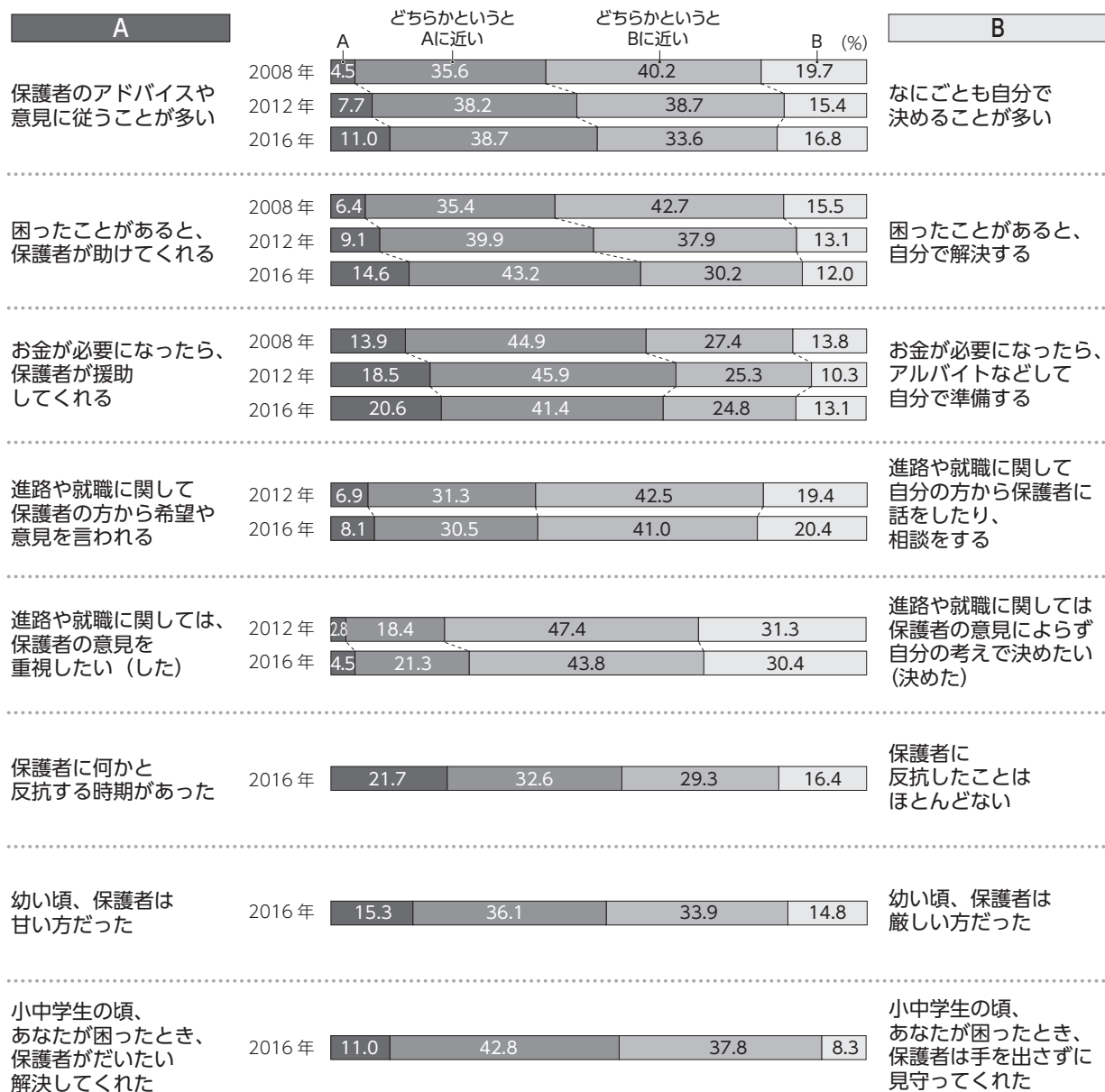
5. 困りごとを自分で解決せず、保護者に頼る大学生が増加

保護者との関係もまた、この8年間で変化のあった項目である。大学のオープンキャンパス、入学式、卒業式などへの保護者同伴が増え、大学による保護者対象の説明会や個別面談などが一般化し、一昔前と比べ大学生の保護者と、大学・大学生との距離は近くなっている。保護者との関係を【A】【B】2つの選択肢のどちらに近いか選んでもらった結果をみてみよう(図1-6)。

2008年から8年間の変化をみると、「A:保護者のアドバイスや意見に従うことが多い(A+どちらかというのとAに近い)」(2008年→2016年9.6ポイント増)、「A:

Q あなたと保護者との関係について、それぞれについてもっとも近いもの1つをお選びください。

図1-6 保護者との関係



テーマ 1 データを読む 8年間の学生の変遷からみえる大学教育の成果と課題

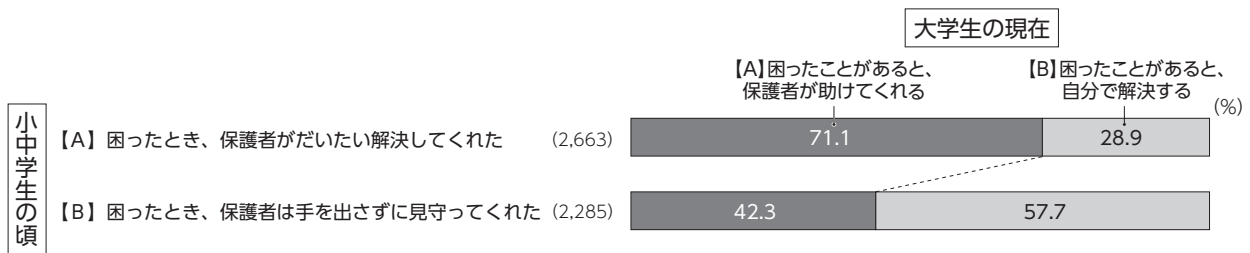
困ったことがあると、保護者が助けてくれる(同)』(2008年→2016年16.0ポイント増)で、自分でものごとを決め、問題を解決する学生が減少し、保護者に頼る学生が増加している。しかし、「A：お金が必要になったら、保護者が援助してくれる(同)」と回答した学生に増加はみられず、経済面ではなく精神面で保護者に頼る傾向が強まっているようだ。

2016年のみの項目のため過去との比較はできないが、「A：小中学生の頃、あなたが困ったとき、保護者がだいたい解決してくれた(同)」が53.8%である一方、大学生になった現在の関係をたずねた「A：困ったことがあると、保護者が助けてくれる(同)」が57.8%となっており、小中学生の頃と保護者に頼る割合がほぼ変わらない。そこで、この2つの項目の関係を確認した(図1-7)。結果をみると、小中学生の頃に保護者がだいたい困りごとを解決してくれたと回答した学生のうち、大学生の現在にも保護者が助けてくれると回答したのは約7割で、約3割は自分で解決すると回答している。小中学生の頃は保護者に頼っていた学生の約3割は、大学生になった

現在は自分で解決するように変化したと読み取れる。一方、小中学生の頃に困ったとき、保護者は手出しせず見守っていたと回答した学生のうち、大学生の現在は保護者が助けてくれると回答したのは約4割で、約6割は自分で解決すると回答している。小中学生の頃は保護者の手出しがなかった学生の約4割が、大学生になった現在は保護者の助けを借りるように変化したと読み取れる。子どもの成長や課題にあわせて保護者がどのように手助けするか、関係性を柔軟に変化させている様子が見える。

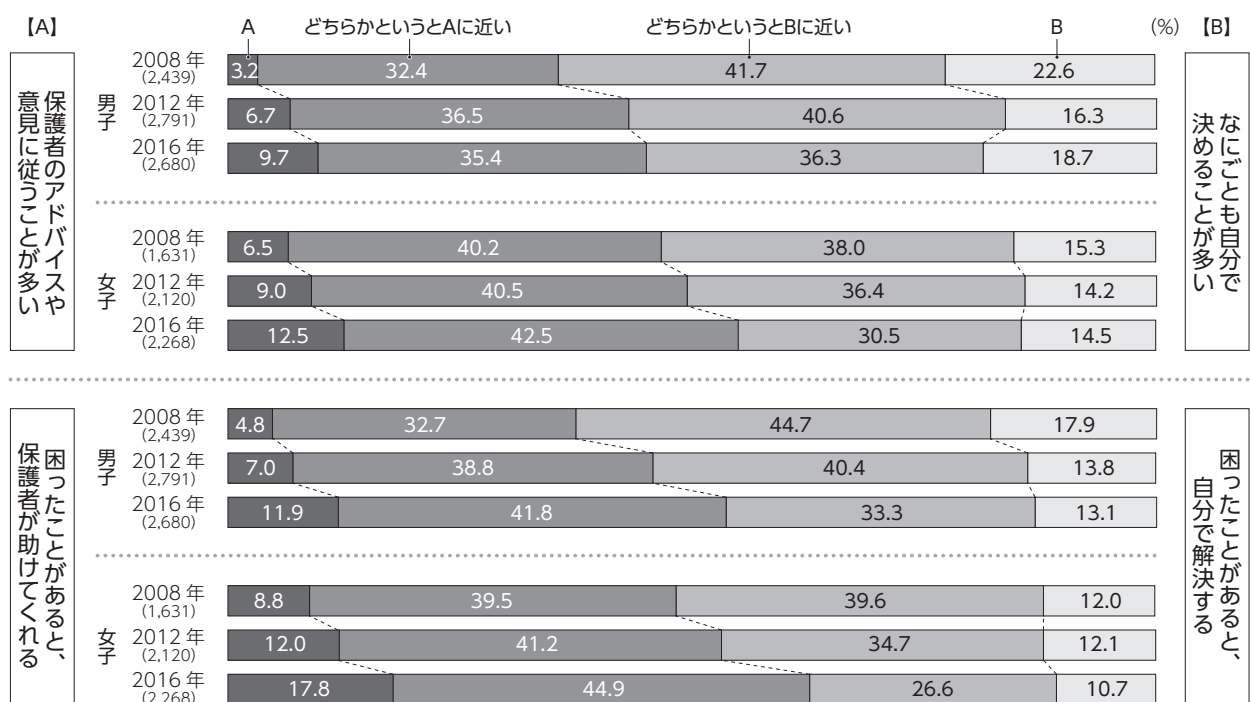
保護者に頼る傾向について、性別にみてみよう(図1-8)。「A：保護者のアドバイスや意見に従うことが多い(A+どちらかというAに近い)」、「A：困ったことがあると、保護者が助けてくれる(同)」は、2008年2016年ともに、男子より女子のほうが10ポイント程度上回っており、女子のほうが保護者に頼る傾向は変わらない。しかし、性別によらず、保護者に頼る学生は増加している。

図1-7 保護者との関係(小中学生の頃の関係別)



※1 【A】は「A+どちらかというAに近い」の%、【B】は「B+どちらかというBに近い」の%。

図1-8 保護者との関係(性別)



【まとめ】 8年間の変化からみえる成果と課題

ここまで8年間で変化のみられた5つのテーマごとに、データの確認をしてきた。最後に、全体として大学教育の成果と課題をまとめたい。

成果は、学生の自己評価において、アクティブ・ラーニングの機会が増加し、授業が多様になり、授業に向かう態度がよくなっている点である。とくに、この4年間でグループワークやディスカッションで自分の意見を主張し、異なる意見や立場に配慮できると感じている学生が増えたことは、授業改革が徐々に実を結んできた成果といえる。また、高校の探究学習が大学での学習に好影響を与えていることが確認できたのも、高大接続の点で大きい。

一方で、アクティブな形式の学びが増え学生は対応できているにもかかわらず、意識の面では楽に単位をとりたい志向や大学や保護者に依存する傾向が高まっている点は看過できない。海外留学を希望しない学生が依然として多いことも含め、受動的で内向きとも取れる大学生の意識は、大学教育改革に逆行しているようにみえる。その背景として考えられる要因は、各テーマ別に述べた。そこで、ここでは大学生の生活を総合的に考えた上で課題を検討してみたく、1週間あたりの学習・生活の平均時間を確認する(図1-9)。

2012年からの比較であるが、平均時間が大きく増加したのは「アルバイト」である。学生の経済状況が厳しくなったためであろう。同じく2012年からの比較であるが「サークルや部活動」、2008年からの比較で「社会

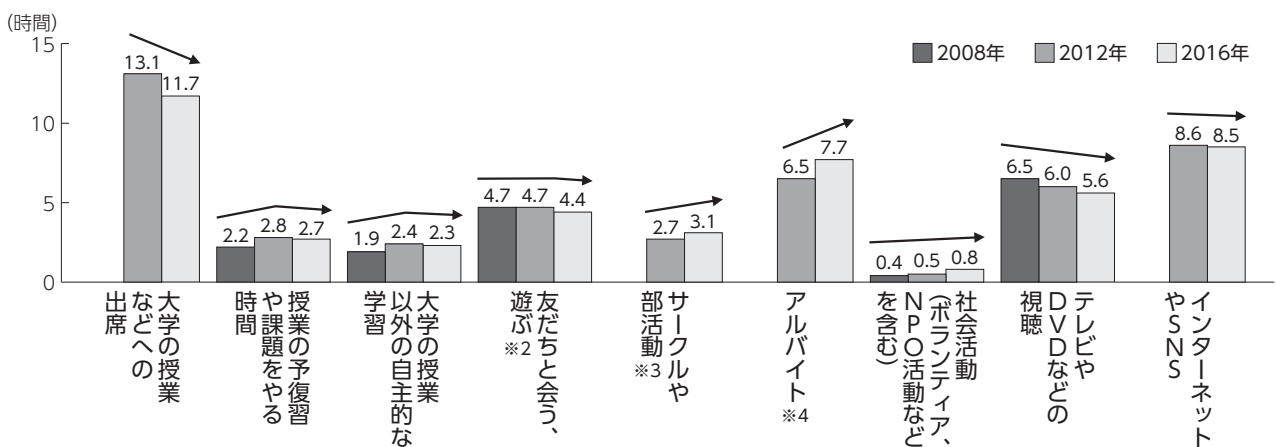
活動(ボランティア、NPO活動などを含む)」といった正課外活動への参画もわずかながら増加している。次に、いずれも2008年からの比較で、「授業の予復習や課題をやる時間」、「大学の授業以外の自主的な学習」といった学習時間も増加している。ただし、学習時間は2008年から2012年にかけて増加しており、2016年は2012年の水準をキープしたにとどまった。

一方で、2012年からの比較であるが、「大学の授業などへの出席」の平均時間が減少している。ただし、履修している平均科目数(2012年9.8科目→2016年9.5科目、図表省略)や、取組み「履修した科目は途中で投げ出さない(「とても+まああてはまる」)」(2012年82.8%→2016年83.8%、表1-3参照)に変化はみられない。このため、授業放棄により出席率がダウンしたというより、楽に単位を取りたいとの意見増加にもみられるように、効率よく単位取得を目指しているか、授業前後の大学での滞在時間を減らしている可能性が考えられる。2008年からの比較では、「友だちと会う、遊ぶ」、「テレビやDVDなどの視聴」といった余暇時間が減少している。とくに「友だちと会う、遊ぶ」は「0時間(やっていない)」と回答した割合が、2008年6.7%→2012年6.6%→2016年12.7%(図表省略)となっている。

このように生活時間の増減をみると、経済的な理由からアルバイトもしなくてはいけないが、授業準備や提出課題をこなすため個人学習にあてる時間もとりたい、就職活動などを考慮すればそれなりに正課外での活動にも参画したい、そのために、大学の授業を効率よくこなし、

Q ぶだんの時間の過ごし方について、次の項目は1週間(月曜日～日曜日)で何時間くらいになりますか。今学期の平均的な1週間を振り返って、それぞれについてあてはまるもの1つをお選びください。

図1-9 1週間あたりの学習・生活時間(平均時間※1/週)



※1 平均時間について、「0時間(やっていない)」を「0時間」、「1時間未満」を「30分」、「1～2時間」を「3～5時間」、「6～10時間」、「11～15時間」、「16～20時間」については中央値、「21時間以上」を「23時間」と置き換えて算出した。
 ※2 2016年は「友だちと会う、遊ぶ」とたずねた項目を、2008年、2012年は「友だちつきあい」とたずねた項目と比較した。
 ※3 2012年調査では、別設問で「サークルや部活動をしていない」と回答した2,101名を、本設問の回答対象者としなかった。2016年と比較するにあたり、「サークルや部活動をしていない」と回答した2,101名を「0時間(やっていない)」とみなし再集計した。
 ※4 2012年調査では、別設問で「アルバイトをしていない」と回答した1,776名を、本設問の回答対象者としなかった。2016年と比較するにあたり、「アルバイトをしていない」と回答した1,776名を「0時間(やっていない)」とみなし再集計した。

友だちと遊ぶなど余暇の時間を減らしている大学生の多忙な状況が浮かび上がってくる。

大学教育改革が進めてきた取組みは、確かにその一つひとつは良質な教育活動である。本調査でも、アクティブ・ラーニングの増加が、グループワークやディスカッションで自分の意見を主張し、異なる意見や立場に配慮できる学生の増加をもたらすなど、授業改革それぞれの効果は確認できる。しかし、それを受ける一人の学生の生活という観点で総合的にみると、多忙で余裕のない方向に変化していることがわかった。いくら良質な教育を

提供しても、学生の負荷が過ぎると、学生は一つひとつをこなすことに必死になって、能動的に動く活力や新たな発想にはつながらない可能性もある。あれもこれもと盛り込んだカリキュラムが、学生にとって総合的にどのように作用しているのか、本調査のような学生の状況を学習・生活の両面から確認できる調査から把握することができる。その情報を活用し、良質な教育活動を増やすばかりでなく、教育目標に対して活動を精選する方向からも検討する時期に来ていることを、この8年の変化から読み取れるのではないだろうか。